

令和2年度第1回八戸産学官連携推進会議 議事録

日時 令和2年11月10日(火) 10:00~11:15

場所 八戸市庁別館8階 研修室

●事務局(高橋教授)

ただいまから、「令和2年度 第1回八戸産学官連携推進会議」を開催いたします。

まず、はじめに委員の交代がありましたので、事務局よりお知らせいたします。長谷川明委員の後任として、八戸工業大学の坂本禎智委員に御就任いただいております。それでは坂本委員より、一言ご挨拶をいただきたいと存じます。

●坂本学長

4月に学長に就任いたしました坂本禎智と申します。この八戸産学官連携推進会議の委員として、皆さんとともにこの地域の発展、並びに活性化のために尽力していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

●事務局(高橋教授)

なお、本日は八戸学院大学の水野学長がリモートでの出席となりますことをお知らせいたします。

次に、本日お配りした会議資料を確認いただきたく存じます。

本日の会議資料は、

- ・ 次第
- ・ 出席者名簿
- ・ 席 図
- ・ 資料1：令和元年度 第3回八戸産学官連携推進
会議 議事録
- ・ 資料2：産学官連携による中長期計画進行管理指標について
- ・ 資料3：推進会議の今後の方向性(案)
- ・ 参考1：産学官包括連携協定書
- ・ 参考2：産学官連携による八戸未来創造中長期計画

となります。過不足等はありませんでしょうか。

それでは、議事に入りますので、小林市長に進行をお願い致します。

●小林市長

しばらくの間、議長を務めさせていただきます。

まず、「案件(1) 第3回会議議事録について」、事務局から説明をお願いします。

●田中事務局長

それでは、「第3回推進会議の議事録」について、ご説明申し上げます。

資料1の「令和元年度 第3回八戸産学官連携推進会議 議事録」をお手元にお配りしておりますが、本議事録については、中長期計画策定稟議の際に既に配付させていただいておりますので、要点のみご説明いたします。

5ページ以降に記載しておりますが、総合計画との整合性について、就職状況について、Uターン支援の取組について、将来ビジョンの表現について、種々の事業遂行の際の財政的基盤についての5項目に関して、委員の皆様からご意見を頂いたところでございます。令和元年度第3回推進会議の議事録に

については以上でございます。

なお、この第3回会議で頂いたご意見を踏まえて修正いたしました中長期計画について、令和2年3月9日付文書にて書面での決議をいただき、合意を得たところです。この書面決議をもって令和元年度第4回会議の開催に代えさせていただきます。事務局からの説明は以上でございます。

●小林市長

ただいまの説明に対し、ご質問やご意見はありますでしょうか。

質問等はないようですので、以上でこの案件を終わります。

続いて、「案件（2）進行管理指標について」、事務局から説明をお願いします。

●田中事務局長

資料2をご覧ください。こちらは「中長期計画」の進行管理指標のデータをまとめたものになります。

まず、進行管理指標についてですが、「中長期計画」では、数値目標を設定せず、定めた指標を正しく測定かつ分析することに努めて、その結果を産学官の三者がしっかり議論することで計画の進行管理を行うということでこれらの指標を採用したところです。

次ページからのグラフをご覧ください。本日は指針1から6のうち、要点のみをご説明いたします。なお、本データは平成30年度と令和元年度の数値をまとめたものですので、傾向を見るというよりは、あくまで現状を把握するための資料としてご覧ください。

まず、1-②「各機関が実施する人材育成等のセミナー開催数」ですが、会議所・八戸市が多いことがわかります。高等教育機関では、工大が多く展開されております。

次に、3-②の「地元企業就職率」ですが、「高校生」の割合が最も多く、就職した学生の約半数が地元圏域での就職となっております。一方、工大、高専では地元就職率が2割を下回っている年度もある状況です。

一概に評価できるものではありませんが、工学部出身の卒業生に地元就職を選択してもらうことが将来的な課題になってくるものと考えております。

続いて、4-②「地域について学ぶ講義数」ですが、八戸高専と八学大が多く展開しております。一方で、「地域について学ぶ」という表現は定義が非常に広く、教育機関ごとに講義の内容は異なるものと思いますので、テーマ設定のあり方等についても情報収集を検討してまいります。

最後に、5-②「各高等教育機関の入学者数」はご覧のとおりとなっております。

今後も各主体による進行管理指標の調査を継続してまいります。進行管理指標についての事務局からの説明は以上でございます。

●小林市長

ただいまの説明に対して、ご質問はありますでしょうか。

質問等はないようですので、以上でこの案件を終わります。

続いて、「案件（3）今後の方向性について」、事務局から説明をお願いします。

●田中事務局長

それでは、資料3を御覧ください。

昨年度策定していただきました中長期計画では、将来ビジョンとして「若者が地域の産業や文化を深く理解し、地域に定着することにより、多様な世代が持続的に生活できる、または生活したくなるまち」を掲げております。

また、平成30年に締結された「八戸市、八戸商工会議所及び八戸市高等教育連携機関との包括的な

連携に関する協定」では、一番目の連携事項として、「人材育成・学びの推進・若者定着に関すること」を掲げております。

そこで、今後の方向性としては、「人材育成・学びの推進・若者定着」を事業の柱として各機関が事業を進めていくことといたします。その際、「中長期計画」における現状分析や今回の「進行管理指標」による「地域の現状」等を確認したこと踏まえ、令和2年度終了までに、「今後の実施方針」を決定し、事業の方向性を定めることといたします。事務局からは以上です。

●小林市長

ただいま、事務局の方から今後の方針、方向性ということで説明がございました。この件につきまして、委員の方から順次ご発言いただきたいと思っております。川村会頭からお願いいたします。

●河村会頭

トップバッターはやりづらくて、どう話していいかちょっと悩んでいるのですが。

私は米屋でございまして、ずっと何代も続くという大変ですが、わたしも創業した時期は分かりませんが、うちの先々代の祖母が明治28年あたりまではずっと記憶がありまして、あとは、大火とかでお寺の過去帳とか全部焼けてしまいまして、過去の記録はほとんど残っていません。ただ色々うちの先々代の祖母とかさまざまの人から聞いたところ、結構古くから米屋をやっております。

当時八戸では米屋といっても、米はあまり獲れなかったもので、雑穀、稗や粟とか大豆とか、そういうものを扱っておりました。米よりもそっちの方が多かったわけですが、戦後になって水田がかなり増えまして、市場も米という形になってきてまして、ちょうど苦しい時に、国の制度の中で仕事をすれば国の卸物を優先的に配給されるということで始めたのがうちの会社でございまして。

少し昔の話をさせていただきましたが、今一番会議所として感じていますのは、非常にコロナが始まってから苦しい、厳しい状況下であるということです。それらに対してどういうふうに残るか、ということが今近々の課題でございまして。

先ほど、人材の確保というものが取り上げられましたが、中小企業にとって人材の確保は、会社の規模に寄らず、その企業の先々の方向性、それからどういう形でやっていくという方向が見えることが第一で、それがあれば学生さんも自然と集まってくるのかなと思っております。学生さんが選べない状況というのは、ある意味では中小企業の事業主の責任でもあるというのを痛感してございまして。

他の業態の話では語弊が生じるかもしれませんが、米穀業界を例にいたします。ほかの業態でも同じような状況だと思いますが、気づいている企業もあれば、気づいていない企業もあると思います。

まず、我々の一番の課題は、水田の耕作者が激減しているということです。今までは激減していく中でも、企業を退職した人たちに声をかけたりして、様々な形で人数を確保して、ある程度のものをやってきました。ですが、その方々も高齢になってきていますので、もう辞めたいという方がほとんどでございまして。元々、農業そのものに従事してきた方々も高齢になってきていて、機会があれば辞めたいという声が多く聞こえております。

それらを考えたときに、私ども企業がこれからどうやって生き残っていくか、所謂、いかに原材料を確保するかということで、さまざま検討しているところで、他方、先生方からもお話を伺っております。その中で感じたのは、中小企業はこれからソーシャルマネジメントを考えていかなければならないということでございます。この考え方は、地域の問題・課題を中小企業が直にそれに取り組み、解決する方法をそれぞれの企業が考えていくというものです。これは多くの先生方が発言されていますが、これから

の中小企業が生き残るには、地域と遊離してはならないと。地域の課題を解決することによって、その地域が豊かになり、そこに企業も生き延びることができるのであり、地域が豊かにならない限りは、地域の購買力もなくなってしまいます。さまざまな方法が考えられる中で、それぞれの中小企業がどのようにソーシャルビジネスに取り組むかということが重要だと考えております。

手前の話で恐縮ですが、私共も今、高齢化に対応する農業の後継者づくりのために、自分たちの企業は何をしたらいいのかということを考え、今年の8月にライケットアグリという米の生産を担う会社を立ち上げたところです。

8年前ですが、当時は業務用のお米の需要が高かったのですが、価格とか生産量などの問題がありました。そのとき、弘大農学部石川教授とたまたまご縁がありまして、これらの問題の解決に向けて、新しい品種の米を作れないかという相談をいたしました。

具体的には、反収が多くて、ほどほどな味で、生産しやすく、コストが掛からない米の品種ということでお願いしましたら、挑戦していただきました。それが今年の8月に、それらしき新種ができたところでございます。味もほどほど、値段もほどほど。反収でいうと、青天の霹靂クラスで1反あたり8俵しか獲れないところ、新品種は大体11俵から12俵くらい生産できます。従って、コストを抑えて1kgあたりのお米の値段を安くできるわけです。振り返りますと、登録証書取るまで8年掛かったわけですが、去年から試作しているのを見ると、かなり質のいいものになっています。温暖化が進むにつれ、青森県の米の品質自体がかなり良くなってきておりまして、皆さんもご存じの「まっしぐら」という品種は元々この役割で開発された業務用の米で、反収が多くて作りやすいという品種ですが、温暖化になりましたらつがるロマンを抜いて、特Aという日本でトップクラスの評価を頂きました。「まっしぐら」は意図してここまでの品質を目指したものではなく、自然に育てていった結果、偶然単価が高騰したのですが、今回は意図的にこれを作ろうということのできたのが「粒こがね」という品種になります。

既に登録新種、登録商標取っておりまして、今年から本格的にやろうということでライケットアグリという会社を立ち上げました。資本金1,000万円で、まだまだ小さい会社ですが、農業高校終わった従業員が1人と今まで飼料部門にいて経験豊富な従業員が3人の4人でチーム作って進めております。あと、女性の事務員が兼業ですがサポートしてくれています。

また、来年卒業する弘大の学生を1人頂くことになりました。石川教授には「ぜひ優秀な学生さんをお願いしたい」と伝えておりましたところ、お気遣いいただいたのか、非常に優秀な成績で卒業する学生にきていただく運びになりました。来年度はこの新入社員を中心にしながら、5人で進めていく予定です。このほか、田植えや稲刈りの時期には、当社の事務員にも3日くらいずつ手伝いに回しながら対応いたします。

生産者の減少という問題は水産加工の分野でも大きな問題になっております。先日武輪水産の方とお話をする機会があった際に、わが社としては生産者が減少している以上、原料であるお米の生産がいくら不足してくるのは明らかで、今のうちに手を打たないと商売の「根っこ」を失ってしまうと思い、ライケットアグリを立ち上げたところとお話したところ、水産加工の方も同様に、原料の不足と価格の高騰によって、商売が立ち行かなくなってきているということで、共通の課題となっております。

我々の業界に限らず、こういった状況により、八戸の中小企業に対する負荷というのが大きくなってきております。それと同時に、今般のコロナの影響もあり、業種に寄らず、中小企業は非常に苦しい状況に置かれているところです。

最近は、特に小企業ではもう跡取りはいらない、帰ってこなくていいと子供に伝えているようです。帰ってきても食うことができるか親として保証できないし、現状を見て、この地域が本当にこれから益々やっつけられるかを判断できない。だからお前は帰ってくるな、と伝えていることを自慢げに言う社長さんもおります。商工会議所としても、中小企業の社長にそういう考え方が増えてくれば、市内の中小企業の会員数は、恐らく目に見えて激減していくと考えています。コロナだけではなく、こういった状況に置かれているということもありますので、これからひとつ皆さんの方からもご協力いただきながら進めていきたいと考えております。もういくつか話したいこともあります。時間もありませんから、私からの1回目はこれで失礼させていただきます。ありがとうございました。

●小林市長

ありがとうございます。新しい品種の名前は粒こがねと言うのですか。

●河村会頭

はい、粒こがねといいます。

●小林市長

字は平仮名。

●河村会頭

漢字で粒書いて、こがねは平仮名でこがねと書きます。

●小林市長

なるほど。今どのくらい作付けをしているのですか。

●河村会頭

今、2町歩ぐらいで作付けしていて、ここ何年かは土地を変えながらやっています。今年はおそらく昨年の倍以上の収穫を期待しています。

もうひとつ、こういうことをやる時に一番大事なものは金融機関ですね。名前は言えませんが、金融機関も仲間に入れて、色々アドバイスを頂いております。金融機関の方も、中小企業の見方というのに対して、大変鋭いものを持っていますので、さまざま助言していただきながら、やっていきたいと思っていました。

●小林市長

ありがとうございます。米作りは田植えの時とか稲刈りの時に人手が結構要る。機械でやっているとは思いますが。はい、分かりました。ありがとうございます。

次に水野学長をお願いします。見えていますか。

●水野学長

はい。おはようございます。大丈夫です。小林市長もしっかりと見えています。私の声は届いていますでしょうか。

●小林市長

今どちらにおられるのですか。

●水野学長

今、東京です。リモートでの参加で申しわけありません。

●小林市長

ご意見よろしく申し上げます。

●水野学長

はい。皆さんの声が少し聞き取りにくくて、的のずれた発言になるのかも知れませんがお許し下さい。

今後の方向性についてというところで、非常に興味深く思いました。実は、先週の金曜日から東京に来ているのですが、土曜日に8baseを見学してきました。午後の2時位でしたが、周りは割と穏やかで、歩いている人はそんなに多くなかったのに、8baseの中は20名くらいとかなり大勢のお客さんがいらっしゃいました。当初私は、年配の方が多いと予想して行ったのですが、実は8割が20代、30代の若い世代でした。土曜日の午後ということもあったのかもかもしれません。それを見てですね、確かに八戸圏域の名産物、非常に沢山ある中で、それだけ多くの若者と出会えて、やはりここはひとつ、若い世代の交流の場にもなっていけるのではないかなと感じました。限られたスペースではありますが、非常に興味深い時間を過ごさせていただきました。

今回の提案の今後の方向性について、本学は8baseを利用させていただいて、授業の一環で大学の1・2年生のなるべく早い時期で八戸圏域のそれぞれの市町村に伺い、地元の魅力・強み・名産物などの特徴を学ばせていただいて、それをこの8baseに紹介しにくるというプログラムをできないかということで、検討に入っております。そういう若者の交流拠点として、単に名産物を売るというだけでなく、若い世代がこの8baseを訪れることによって、八戸の魅力・強みを伝えるための都内における情報・交流の拠点になると思っています。まずは本学の取組として始める予定ではありますが、今後それぞれ、八工大さん、あるいは高専さんとも連携しながら、なにかそういうプログラム、実績を作っていける方向性を検討していきたいと思っています。

坂本学長、圓山校長もご存じのとおり、青森県では、弘前大学を中心として行われていたCOC+の後継事業として、やはり人材育成、そして地元定着推進事業というところで、県の大学、高等教育の連携による協議会がスタートしておりますし、そういう連携が現に始まっています。八戸ブロックは高専、圓山校長がリーダーとして取りまとめをしていただくことになるのですが、今回八戸学院短期大学部もこの協議会に参加させていただくこととなりました。今後それぞれの取組を通じて連携しながら、今日提案いただいた今後の方向性にある人材育成、学びの推進、そして若者定着。こういうことをテーマにした取組を発展させていければと思っています。

最後に事務的な質問ですが、今後の方向性の人材の材の字、この字で行くのか。青森ですので、財（たから）でいくのかも事務局に検討していただいて、統一して今後使っていければいいかなと思いました。以上です。

●小林市長

はい、ありがとうございます。人材については今後また検討していただいと。宜しいですか。

●事務局（田中教授）

かしこまりました。

●小林市長

大変ありがとうございます。続きましてですね、杉山学長お願いします。

●杉山学長

はい。私の短大は学科が幼児保育学科と介護福祉学科の2学科であります。この今後の方向性のところで、若者定着ということですと、幼児保育にしても介護福祉にしても、元々地元志向の学生が多く入学していると思います。管理指標で見ても本校の地元定着率は比較的高いわけですが、その中で幼児保育については、ここ数年、仙台や関東に流れていく学生が増える傾向にあります。この3月に卒業した学生の場合、県外に進路を決めた学生は今までで1番多く、3割を超えておりました。

一方で、今の2年生に関しては、就職動向調査の結果を見ると、県外への進路を希望する学生の割合がかなり下がっています。これがコロナの関係なのか、学年の特性なのかは明確ではないですが、県外に出ようと思っている学生は十数人くらいで、今年の2年生については、かなり地元定着意欲が高いという状況となっています。当然、出ていくことを止めるわけではありませんが、良い傾向だなというふうには思っています。

元々、卒業後県外に出ていく学生も、実際に戻ってきているかはともかく、出ていく段階ではいずれ戻ってくるつもりでいることがほとんどです。実際に学生と話をすると、給料の面で条件のいい東京で数年稼いで、若いうちに遊んで、奨学金を返して、そして何年か後には帰ってくるというビジョンを持っていることが多い。中途採用が一般的な保育者にとっては、一度県外に出た学生が戻ってくる道を上手く整備できれば、将来的に地元に戻ってくる人材は育てていけるのではないかと思います。

ただ気になる点として、毎年1割弱入学する男子学生について、保育者として仕事に就き続けているケースは少ないようです。なかなか、同窓生の調査というのはできていないのですが、学生の伝手で聞く限りだと、卒業から5年経過した時点で、同級生で保育者を続けている男子は自分1人ですとかは聞いております。女性の場合、転職する動機で多いのは人間関係です。上手くいかないとか疲れたとか、理由は色々あるわけですが、男子の場合は、金銭面が問題で、やはり食べていけないというか、1人ならともかく、結婚して家族を養うという意味では、保育者を続けながら家族を養うということは、奥さんが働く前提であっても、かなり厳しいという現状があります。男子学生の状況を見ていると、多少改善されてきているとはいえ、職種としての待遇に課題を感じております。

一方、介護学科についてはそもそもの学生数がまだ十分に確保できていないという状況です。それこそ介護という分野は、先程河村会頭のお話にあった「地域の課題を解決する」ということに直結する、高齢社会を支える人材ですので、本当に大事な人材だと思っています。そこに学生が集まらないということについては、様々な課題があると思いますが、一番の問題は地域で働き続ける仕事として、介護が魅力ある仕事になっていないのかなと感じています。先ほどの男性保育者の話とも関連しますが、やはり収入面などの様々な点について、待遇の改善や専門性の向上など、介護職に対するイメージをよくしていく必要があると思います。

学生の資質として、おじいちゃん・おばあちゃんとかそういう人を支える仕事をしたいという学生は、多くはありませんが、中学生・高校生にも一定数います。ですが、そういう仕事をしたいということで例えば親御さんとか学校の先生に相談した際に、介護じゃ食べていけないから辞めたほうがいいとか、そういう言われ方をすることが多いという話を聞いております。親世代や教師が持つそのイメージから変えていく必要があります。介護の職業上の魅力を上げていかなければ、学生数を増やしていくのは難し

いですし、それは短大単独ではなかなかできないことですので、市や事業所と一緒に職業の魅力を上げていく取組ができればいいと思っています。そしてそれを中学生・高校生に伝えていくということをこれから是非していきたいと思っております。

●小林市長

はい、ありがとうございます。それでは続きまして坂本学長お願いします。

●坂本学長

はい。まずは事務局の方からご提示いただいた資料3についてお話したいと思っております。来年3月までに今後の実施方針を決定ということでございますので、柱として掲げた人材育成・学びの推進・若者定着というのは素晴らしいと思いますが、これを単独の例えば八戸市・商工会議所・そして高等教育機関が独自に進めるというだけでなく、連携の在り方を定めていただきたいと思います。何といたっても大切なのは、3つの機関の連携ということですので、具体的にどういう形で連携していくかというところをきちんと据えた状態で、今後の実施方針を定めていただければと感じたところでございます。

もうひとつお話したいことがあります。もしかしたら皆様の流れから外れるかもしれませんが、大風呂敷を広げたような話になってしまい、具体的にどのように実現するのかということも含めて、不安を感じながらお話しします。

人材育成・学びの推進といったところで、ポイントになるのは高等教育機関の学生達ですので、学生が地域学を学ぶということ、例えば八戸の公会堂などの大きな会場を借りて講義をやるということができないかと考えております。多くの学生が一斉に集まってきて、講義が終わったらすぐまた自分の大学に戻るっていうのも大変ですので、例えば2、3日、終日使って、3日間ぐらいで15コマをやります。そこには一般の市民の方も入ってきて、地域のなんたるかをみんなで理解し合う機会にする。そういう場を作れば素晴らしいなど。そして、お昼は皆さんでご飯を食べに街中にどっと出ていけば、中心市街地の活性化にもつながる。そういった広がりを持った連携ということができればいいと思っています。

講義のところは市長さんにもご登壇いただければなおいいなと思っております。また、市長さんだけでなく、街中の方や企業の方、ほかにも色んな立場の方が、ひとつの系統だったストーリーを作った上で、ちゃんと学生たちが八戸を理解できる内容にまとめていく。市民の方にとっても、地元への愛着が増すような、地元への意識を拡大させられるような連携をしながら進めていく。皆さんが元気になるってことは、先程会頭さんもおっしゃっていましたが、豊かになるということで、企業の誘致とか、いろんなところにも、八戸への進出に向けた意欲が増すようになっていけばいいなということを感じておりました。以上です。

●小林市長

はい、ありがとうございます。引き続き圓山校長お願いします。

●圓山校長

はい。ご存じのとおりコロナ禍で大学等も大変なことになっております。それでこれからどうなるのか。もちろん地域産業、特に飲食関係は今大変なときだと。それから北海道で大感染が起きていますが、これは北から順番に降りてくるというのは、ほぼ確実だと私は考えておりました。あんまり冒頭から楽しい話ではないですが、楽しくない話からさせていただきます。

今年の3月から解析を始めていますが、飛沫について、今ようやく富岳でその話が出ていますが、飛沫が乾燥すると1ミクロン程度の粒子になって落ちなくなる。空気中に3時間くらいいます。浮遊しているわけです。そういうふうな状況の中で窓を開けられなくなってくると感染のリスクは高くなってくる。それから、感染というのはべき乗で、倍々ではなく何乗で広がりますので、それであつという間に広まります。ヨーロッパ、イギリス、フランスあたりで大流行していますが、それは換気が不十分であることがひとつ大きい原因なのかなと自分では勝手に感じております。ヨーロッパの南部は私も住んだことがあります。窓が小さいです。ベランダみたいな大きな窓がないので、クローズの場所が多いわけです。あとは、色んな副次的な要素で、皆さんマスクはしないと、挨拶は握手が最初。それで感染とか、習慣的な要素も色々あるわけですが、やっぱり1番大きいのは換気状態の問題。多分、これから東京も1,000人規模の新規感染者が普通になってくる可能性が非常に大きい。

特に北のこの地では、本校でも窓開けろと言っておりますが、講義室で夏は大きく開けていたのが、段々狭くなっていく。寒くなりますから当然です。そういうところで非常にリスクを抱えていると思います。高等教育機関が今どうしてるかということ、一つは遠隔授業がございまして。対面でなくても色々できるというところに今どんどん進んでいる。それから遠隔の会議。これから学校が閉鎖しても、教員は自宅で授業ができるようになっていきます。それから水野先生は今東京におられますが、こういった会議が普通になってきております。距離の感覚がなくなって、学会もほとんどがリモートです。発表なんかも非常に味気ないです。顔がいっぱい出ていて、発言するとその人の顔が大きく出て、一回議論しておしまいとかですね。当然飲み会はないですし、全然楽しくないです。ただ、情報交換として考える分には非常に有効だと思います。

それから、東京地域でもテレワークは普通になってきています。人材育成・学びの推進・若者定着の若者定着の話から始めさせていただきますが、そういう状況の中で、高等教育機関の卒業生が地元に残らないのは何か理屈があるかということ、先ほど杉山先生おっしゃったように、給料がちょっと低いと。それもあります。それから、そもそも産業が少ない。工学系は地元で産業がないので東京に行かざるをえないというところがございます。そうすると、企業誘致というのがやはり重要になってくるわけです。これは小林市長をはじめ、市として非常に努力されておりますが、コロナで世の中が変わったときに、何が起きたかということ、冒頭に申し上げましたように、距離が関係なくなってきているわけです。テレワークやウェブ会議など、インターネットがあれば済んでしまう。さっき言ったようにつまらないわけですが、会わなくても仕事は大方できてしまう。八戸ないし、青森県は東京からちょっと遠くて、新幹線ができてかなり近くはなりましたが、それでも仙台に比べれば倍の時間がかかるし、首都圏に比べたらとてつもなく時間がかかるような場所なわけです。これに対し、都心に大きな会社が集まる理由として、得られる情報量が都心と地方で大きく違ったという点、社員を出勤させるのに都合がよかったという点が挙げられましたが、その障害が取り払われてきていて、青森県でも十分勝負ができるような業種が出てくると思います。気候的にも住みやすく、賃金も安い、それに南部の人たちははしぶといので離職率が低いと言われていた。こういった点は企業にとっての魅力であり、企業誘致につながる要素だと考えています。

実際に、サンコンピュータとかヤフーなどのIT関係企業の進出が進んでいますが、IT系企業を集中的にというよりも、テレワーク等を中心とした雇用に積極的な企業にもベクトルを向けた誘致というものも考えていければいいのかなと思います。こういった企業のメリットとして、市内においても場所を選ばないというのは非常に大きい。北インター工業団地が完売したと聞いていますし、新しい工業団地の整

備が進んでいますが、これとは別に、中心街近くの空いている建物等を市が斡旋してオフィスができれば、中心街の飲食店も賑わう。また、私は市の総合計画の交通方面の委員を担っておりますが、市バス等の公共交通機関はほとんどが中心街を経由するので、働く人が自宅から自家用車を使わずに通勤できるというメリットもある。産業として成長しながら、若者定着も図れる魅力ある企業を誘致するのは難しいことではありますが、夢がないとこのコロナ禍の中では窒息してしまいますので、そういう方向を考えていければと思います。

もう一つ、今の話とも関連しますが、高等教育機関は今、遠隔授業をやっております。八戸高専も早々に遠隔授業に取り組み、春学期はほとんど遠隔授業で、そのあと対面授業に戻しています。現時点で、遠隔授業のコンテンツが90分単位で約2,000のコンテンツができておりますが、今後これをどう活用するかを考えているところです。

今はAIを使うことで、遠隔授業のコンテンツを英語やタイ語に変換できます。多少手を加える必要がありますし、システム上の問題も出てきますが、この手法を授業コンテンツに取り入れることで、比較的簡単に授業を国際展開することができます。実際、先日開催したタイでのセミナーで、日本語の授業をAIで英語に翻訳して、タイ人の学生に聞かせました。こういった新しい教育が遠隔授業の産物として出る可能性がありまして、今文部科学省に少し当たりかけているところです。このような取組を八戸地区で推進して、国にもアピールしていければいいのかなど。今IT事業やAIの分野に対して、国から予算出ているので、これと地域の活性化を組み合わせ、高等教育機関が集まっているという利点も生かしながら、新しい起爆剤となるような取組も考えていけたらと思っているところでございます。ちょっと長くなりましたが以上でございます。

●小林市長

ありがとうございました。グーグル翻訳も無料ですが、かなり精度もよくなってきていますよね。

皆様大変貴重なご意見伺えました。シナリオだとここで市長からひとことと書いてありますので、私も何点か申し上げたいと思います。

ひとつは、八戸学院大学の1年生に対する地域文化論という講義で、地元の間人が講師として授業を行う機会がありまして、私も必ず毎年講義をさせていただきます。その際、感想文を頂くのですが、押しなべて初めて知ったという感想が多いです。何を話すかという八戸の歴史や産業がどう推移してきたとか、今どんな状況で、青森県の中でどういう位置にあるのか。そういったことをかなり詳しく申し上げるわけですが、要するに「こんな町だったのか」という反応、ご意見が多いです。特に臨海部の工場の状況や水産業の状況、農業の状況、先ほど河村会頭からもお話がありましたが、大きな産業としてこの地域を支えているということなどをお話させていただきますが、若者が地元について学ぶ機会が意外と少ないということを感じております。体系的に八戸という町はどういうところかということについて知っていただく機会が増えれば増えるほど、すぐ繋がらないにしても、学生さんの地元定着に関して、将来的なふるさとを考える上で、非常に重要かと思っております。昭和4年の合併に始まり、先人がどういう思いでこの八戸という町を、基盤をここまで作ってきたかということをもっと知ってもらうのも非常に良いのかなどいうふう感じたところです。

そういう意味では、先程坂本学長からもお話がありましたが、八戸を知る機会を街なかで作ろうというのは、素晴らしいアイデアだと感じておりました。また同時に、高等教育機関がこれだけ集まる中で、市民がその「知」を直接享受する機会が少ないということも昔から感じておりました。最近ある工大の先生

の本を2冊ほど読みましたが、非常に興味深く、地元このような先生がいることに驚いたところです。私が存じ上げないところでも、そういう先生方はたくさんおられるんだと思います。だからこそ、その素晴らしい学問について、市民も間近で聞ける機会があってもいいのではないかと考えております。市では市民大学講座を開催しておりますが、基本的には大手の講師派遣の会社が入って、知名度に応じて値段付けがなされているところから、予算に応じて先生をお招きして、市民に向けて話していただくというものです。地元素晴らしい先生がたくさんおられる状況ですので、そういう先生にお話いただくことで、市民の皆さんが高等教育機関の「知」を享受できる新たな機会を提供するというのも良いのかなと感じました。これは学生の定着とは方向性が違うかもしれませんが、そういうことも併せて考えてもいいのかなと思ったところです。その場合にはここにおられる学長さんにもご登壇いただいて、話をしてもらおうと面白いかなというふうに思っております。

それから8baseですが、水野学長においでいただいたということで本当にありがとうございます。そもそも連携中枢都市圏ということで、8市町村で取り組んでいる事業ですが、地場産品を売り、またレストランで楽しんでいただくということと同時に、八戸圏域の都内におけるPRの拠点として、UIJターンに関わる情報を直接発信していこうというのが大きな柱になっています。八戸はどんな会社があって、自然や文化の魅力を通じて、「帰ってくるなら今だぞ」という情報を定期的に出していこうということをやっています。移住については、県の事業と市の事業の成果として、八戸が県内で一番移住が多いという状況になっておりますので、これを後押しする機能を持たせ、積極的に取り組んでいるところです。コロナ禍の中で難しいところもありますが、月に2回くらい、色々な形のイベントを開催して、八戸と関わりのある方においでいただいて、またそれを広げていこうということをこれからも続けてまいります。

あとそれから、圓山校長の方からお話ありましたが、昨今どこでも働けるという環境が非常に整いつつあると思っております。誘致企業のYahoo、今市内の事業所で300人くらいの規模ですが、最初何をしようとしたかという、種差に半地下の事務所を作って、出来るだけ自然を壊さずに、窓だけ海に面した形で仕事ができる空間を作ろうとしました。昼は大須賀海岸で馬に乗ってですね、仕事終わったらアクセスのよい中心街でお酒飲めるという環境を作れないかという話が実はあったところです。結局、リーマンショックで実現しませんでした。絵まで描いていました。それでもIT、テレマーケティング関係の企業は、かなり八戸に来ていただいて、今は20社以上、雇用で1,400人くらいという状況になっています。そういった意味でワーケーションが地域的にも根付いてきていると感じています。実際に本社の部長が八戸で働いているというケースも出てきました。コロナ禍を逆手に取るような形で、ゆったり暮らして、きちっと仕事も出来る環境のモデルを発信することで、そういったことに積極的な企業の誘致にも繋がってくるのかなと思っております。

今、全国の有効求人倍率が下がってきて、青森県内も同様に下がっている状況ですが、八戸はまだ持ち堪えていて、1.26という状況が3か月続いています。この先も維持できるかは分かりませんが、テレワークに積極的な中小企業を中心として、地域の求人が維持できている状況ですので、我々も積極的に情報発信していきたいというふうに思っております。

それから企業誘致の話もありましたが、コロナの影響もあり、営業活動が一切できない状況です。市内の企業でも、海外に販路を持っているところは同じ悩みを抱えていて、非常に大変な状況にありますが、それぞれの企業でもさまざま努力していただいています。市としても色々な方策を模索しながら、センスよく応援していきたいと考えております。ひと言で終わりませんでした。私の発言は以上とさせて

いただきます。時間は押ししていますが、八戸工業大学の坂本学長から皆様にご説明したい案件があるということで資料が配られていると思いますので、坂本学長お願いします。

●坂本学長

時間も押し迫っているようですので簡潔にお話したいと思いますが、再来年ですけど2022年に改組を行います。本当は事前に皆様からご意見を伺って、検討してから進めるべきところでしたが、コロナの関係もあり、既に文科省に事前相談をしております。内容的なものについては既に了承を頂いておまして、2022年4月にこういった形でスタートする予定です。本日はご報告と併せて、方々ご意見を頂ければ、スタートに向けて何らかの形で改善を図っていきたいと考えているところでございます。

資料をお開きいただきますと、工学部の編成について、これまで左側のページにありますように5学科あったものを、1つの学科に統合して5コースにするということになります。

この目的・利点として、国で求めている文理分断からの脱却や、STEAM教育の推進を通じて、いろんな視野を持った人材を育成してほしいとされていることも踏まえて、SDGsや、Society5.0社会など、変化が激しい時代を生きる上で必要とされる人材の育成を目指しております。また、コロナの状況にあつて、仕事の内容あるいは働き方がどんどんアップデートされている状況の中で、企業としては、入社した若い社員が自分の専門に捉われているようでは立ち行かなくなるということで、幅広い視野をもった学生を育てるために、工学部を一つの学科にして5コースにしました。今後はコースごとの横のつながりを織り込んだ新しいカリキュラムにしていきたいと思います。

それから本学は工学部と感性デザイン学部の2つの学部があるということで、デザイン教育、発想力、アイデア力を工学部の学生にも一緒に学ぶ機会を作っていくというのが構想でございます。

ひとつだけ例を挙げますと、ロボットは機械、電気、情報などの複数の専門分野の融合技術の結集体になるわけです。当然教員の専門分野も、色んな技術に関連してまいります。そのような中で、学生が自分の卒業研究を選ぶ際に、興味を持った分野・技術に対して、この学科だからこの先生の所に行けないとか、そういった弊害なく自由に専門の先生を選んでいけるという利点がございます。大きな技術に対し、多分野の知識が必要になる中で、横の繋がりを強化することによって、自由に効率よく学べるということでございます。これを再来年スタートさせたいと考えております。どうぞご意見等頂ければと思いますのでよろしくお願いいたします。

●小林市長

はい、どうもありがとうございます。それでは今ご説明ございました改組についてご意見を頂きたいと思います。皆様一通りご発言いただきましたが、足りなかった点あるいは委員の皆様からお話あった点も踏まえて、今の工大のお話も併せてまとめてご発言いただければと思います。同じ順序で河村会頭お願いします。

●河村会頭

お言葉に甘えて。ちょっと説明を補足しますが、うちの会社案内です。上の一番左が精米機で大変高価な機械になります。これが1億円で、2機並んでいます。次に色彩選別も最新のものですが、これは大体5,000万円です。このように設備投資に非常にお金が掛かります。米は利益が少ないのに金のかかる商売です。特に品質管理には注意が必要で、セブンイレブンやユニバースのような一部上場している会社が抜き打ちで検査にきます。でするので、うちの会社では最初に農協から来た米を自動で機械選別します。

100 両の中で水分、デンプン量、アミノ酸量などを全部自動で調整して、それが最終製品になっていきます。これを検査されるわけですが、惣菜用の米はこの米をこの比率でとか、デンプン質はこのくらいで、アミノ酸はこのくらいでというのを細かく指定されています。これに合致しないと返品です。安定して納品するためにこれらの機械を揃えているということです。昔に比べ、食べ物に対する品質・衛生管理がものすごく厳しくなっています。

それから、もうひとつのハサップで、日本酒の歩精機械があります。奈良の会社に続いて日本で2番目に酒米の歩精のハサップを取りました。たかが米ですが、結構お金掛かかるので大変ですというお話しで終わります。

●小林市長

ありがとうございました。それでは、引き続き水野学長お願いします。

●水野学長

もうまとめているのかもしれませんが、最後、小林市長と河村会頭に。今後やはり大学生にとっての今後の一つの方向性っていうのは地域を学べるキャンパスにして、学生が市内だけでなく八戸圏域にどんどん出て行って地域の魅力を学び、そして問題や課題をしっかりと実感できるというところにあるのではないかと考えています。

今後そのような取組みを考えていきたいと思っていますので、若者がどんどん地域に出て行って、今まではインターシップや就職という繋がりでは考えられている学生の活動を、もっと地域の皆様と協力して、次世代の人材と一緒に育てていくという思いで今後の取組みに参加していただけるよう、市長とそして会頭から情報を発信していただけたらなと思います。どうぞよろしくお願いいたします。以上です。

●小林市長

ありがとうございました。次に杉山学長お願いします。

●杉山学長

先程市長から、八戸学院大学で地域学の講義をすると学生の感想で初めて知ったというのがほとんどという話がありました。実際そうだろうと思うのは、自分は茨城県出身で高校を卒業したあと地元を離れて、あとはたまに帰省するだけで、本当に茨城の事を全然知らないなど。たまに人に聞かれても本当に知らないなと思います。だから地元を出たわけではないですが、「知るところに愛は生まれる」という言葉があるように、そういう地域のことを知る機会はすごく大切で、それが先程、坂本学長からお話があったように、大学の中で学ぶ機会も大事ですが、地域の学生が集って一緒に学ぶというのも、素敵なアイデアだと思いました。坂本先生には、以前にも工大とうちで、一緒に科目を分け持つことができないかというアイデアを頂いたことがあって、本当に刺激になっています。実現するには色々障害があるかもしれませんが、皆で集中して学ぶ地域学、具体化に動けたらというふうに感じています。以上です。

●小林市長

はい。ありがとうございました。圓山校長。

●圓山校長

先程、坂本先生からお知らせあった改組の件ですが、非常に期待しております。特にシステム情報工学

コース、電気通信工学コース等の情報関係の学科を卒業した学生が、先程申し上げましたような八戸の IT 関連の産業に大きく貢献できるような人材になれると考えてございます。

今回コロナで儲かっている企業は世界的にも国内的にもみんな IT 関係です。また、お米などの食関係は、人間が生きるうえで絶対食べる必要があるのです。そういう業種は安定ですが、残念ながらエンターテインメント系やお酒関係はかなり厳しい状況です。やはり IT はこれからどんどん発展していきますので、企業誘致も含めて進めていただければ。私もこの前中国の弟子と TV 会議で普通に会議をしましたが、距離の感覚がございませんので。

あともう一つ、距離の感覚がないといっても、ものすごく離れていると結構大変です。そういった意味で東京まで3時間弱で行けることは大きな利点です。毎日通うことはできないが数週間に1度くらい、日帰りでも帰れるという距離感は結構大事だと思います。それとこの地域の人材、先ほど坂本先生から改組で目指す新しい人材像をお話いただきました。それから地域性、交通の利便とかそういうのも含めると、今後八戸が更に発展する要素であり、地元定着率を上げる要素がたくさんあると思っていますのでよろしく願います。以上です。

●小林市長

ありがとうございます。それでは坂本学長。あれば。

●坂本学長

色々ご意見頂きましてありがとうございます。今日初めて参加させて頂きましたが様々な視点がまた頭の中にインプットされました。ありがとうございます。

●小林市長

それでは、大変ありがとうございました。若干ですがオーバーしました。申し訳ございません。事務局においては、本日各委員から賜りました意見を踏まえ、今後の実施方針各種の検討を進めていただき、次回の会議においてご報告いただきたいと思っております。それでは司会の方へ進行お返ししたいと思います。

●事務局（高橋教授）

ありがとうございました。

最後に、今後のスケジュールの確認でございますが、次回は令和3年2月頃の開催を予定しております。開催が近づきましたら、改めてご案内差し上げますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、これもちまして、「令和2年度 第1回八戸産学官連携推進会議」を終了いたします。本日はありがとうございました。